

現代生物ゼミナール(1980)

研修部

第101回 ロッキー山脈紀行 54. 10. 20
神戸市立教育植物園 林 中元
詳報：第6回公開講座の記録に掲載
(兵庫生物Vol.8, No.2)

第102回 理科教育とガラス 55. 6. 21
その1 意外と知らないガラスの常識
日電理化学硝子販売(株) 霜下 浩章
その2 実験の精度とガラス器具
日電理化学硝子販売(株) 霜下 隆俊

第104回 医・理学用硝子器具の製作 55. 6. 21
(第1回理科施設セミナー)
日電理化学硝子販売株式会社・本社工場

第102・104回は、兵庫県高等学校教育研究会生物部会・昭和55年度総会行事として実施、詳報：同総会記録に掲載 (同部会誌Vol. 8)

第103回 理科Iの問題点 55. 8. 29
大阪大学 今堀 宏三

I 理科Iの成立について

1. 基礎的内容, 2. 観察・実験を通じて科学の方法を, 3. 自然環境の科学的理解, という3点からの理科I成立についての公式の経過について述べられたのに続いて, これを取りまく種々の現実的な経過について触れられた。また, 現在の高校理科が, 大学生にどの様に定着しているかについて, 特に生物学的素養の問題を大学教養部の学生での調査を基に, そのいくつかを例示された。中でも, 文系学生の方が理系学生より生物素養があるという調査結果などがあり, 大学入試の影響等が改めて考えさせられた。また, 現行の教育課程の中でも, 文部省が力を入れた「基礎理科」が明らかに失敗に終わっているのに, 再び, 同系統の理科Iを敢て登場させた事が大きな問題点である事の指摘があった。そして, この背景についての興味深い挿話があり日本の教育課程編成の実態についての認識を深めた。その反対に, 世界各国での「総合理科」の内容についての方向についての紹介があり, 目指すべき理科Iの方向を示唆させた。

II 誰がどのように教えるか

高校理科教師へのアンケート回答を基に, 担当の可能性, 理科教師の定員, 他教科担当の現状, 他教科の講義, 実験担当の困難度等のデータを基に, 誰が理科Iを持つのが妥当か, 又, 文部省の意向とのズレ等についての指摘があった。この中で, 生物教師側の柔軟性が強調された。

III 理科Iと選択生物

460校の高校での現行理科の選択状況データから, 理工科と選択理科の関係を予測され, 更に, 大学進学率の問題と共通一次試験の科目設定の見通しに触れられた。結論的に言えば, 理科Iは大学入試とは余り関係が無いと見てよく, 若し理科Iが入試科目としても入っても, 大学側は高校1年修了時の理工科の学力を見る訳ではなく, 高校卒業程度の学力での理科Iの学力を要求する事になるだろうとの事であった。従って, そのためには, 高校3年でもう1度理科Iをやり直さねばならぬだろう。この場合, 現行共通一次での基礎理科選択者の成績が明らかに低い事を無視出来ない。

最後に, 生物科の教師が1年生の理科Iを担当する場合, 教師の持つ自然観・物質観を全面に押し出して, 教科書にとられる事なく, 生物学的見地から自然界を見た場合に, 如何にすばらしいものであるかを, 信念を持って授業すべきであるし, それは, 選択生物へのいざないとなる様にすべきである, と話を終えられた。